



人と農と環境をつなぐ技術を考える

国際耕種株式会社

〒194-0013

東京都町田市原町田 1-2-3

アーベイン平本 403

tel / fax 042-725-6250

mail aai@koushu.co.jp

URL www.koushu.co.jp

隣国での結集：スーダンの遠隔作業

2019年4月11日、スーダンで発生したクーデタにより30年間、政権の座にあったバシル大統領が退陣した。前年12月から国内各地においてパン・燃料などの価格高騰に対する民衆の抗議活動としてデモが活発化していた。そんななか、ついに軍部が民衆側につくかたちで政権トップを拘束するという政変劇がおこった。そのとき筆者らは、技術協力プロジェクト「リバーナイル州灌漑スキーム管理能力強化プロジェクト」の活動に従事しており地方都市のダーマルに滞在していたが、この事態をうけて緊急退避を余儀なくされた。クーデタ発生から帰国まで数日間を要したが、地方都市ダーマルから首都ハルツームまでむかう途中、そして空港から飛びたつまでに市街の様子は平穏さをとりもどしつつあり、正直なところ、それほど緊迫感はなかった。そのときは、一時帰国せざるをえなくなったものの、じきに情勢はおちついて、スーダンでのプロジェクト活動を再開できるのではとの期待をもっていた。

しかし、2ヵ月後、そんな淡い期待はみごとにうらぎられた。日本待機中の6月初旬に、軍一部による民衆デモ隊の強制排除で多数の死者・負傷者がでてしまい、外務省の危険情報レベルが2から3へと引き上げられたことで、JICA 日本人関係者のスーダン渡航ができなくなってしまったのである。上述のプロジェクトは4年目の終盤をむかえており、総まとめの重要な時期であったが、渡航が停止されたことで、第三国での遠隔監理で終了にむけて活動していくことになった。幸いなことに、スーダン側のカウンターパート（CP）、ナショナルスタッフ（NS）らとは活動の方向性、課題が十二分に共有されていた。JICA 側との協議の結果、隣国エチオピアにおい

て、8月中旬から11月にかけて約2週間単位の出張で3回にわたる遠隔作業の実施が決まった。

このような経緯で、エチオピアの首都アジスアベバのホテルに滞在し、スーダン人 CP・NS の10余名と合流し、日本人5名との共同作業が開始されることになった。おもな作業内容は、クーデタ以降の日本人不在時の現地作業の確認、最終完了セミナーの実施準備、技術マニュアル・普及ガイドライン等の作成であった。そもそも CP・NS は灌漑と営農の2チームにわかれるが、ホテルの一室での集中的な数日間の缶詰作業となるなか、プロジェクト現場以上の緊密かつ一体的なチームワークが次第に醸成され、作業がぐんとはかどったようにおもう。終わらなかった積み残し部分は、次回渡航までの宿題となり、また顔をあわせて確認するという感じで共同作業がすすめられた。暑熱のスーダンから寒冷なアジスアベバにはいい、朝晩の気温差から風邪をひいて体調をくずす CP・NS もいたが、われわれの予想をうわまわる作業効率であった。

さて、9月以降、スーダン渡航が可能となる危険情報レベルにもどったため、結果的に3回目のエチオピア渡航はなくなった。最終完了セミナーは、遠隔のアジスアベバでなく、日本人も参加してハルツームで実施された。プロジェクトの有終の美として、農家・農村女性をふくめてスーダンでお世話になった多数の方々に感謝の意をこめて直接のお別れができたことはよかったにはちがいない。ただ、スーダン人と異国エチオピアで2回にわたり結集できたことは、彼らの新鮮な一側面を発見する貴重な機会として刻まれた。

(2020年2月 古賀)